

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01148

研究課題名(和文) 琉球列島における旧集落「古島・元島」から現集落への移動秩序の可視化手法による解明

研究課題名(英文) Elucidation of migration order from old villages "Furujima/Motojima" to current villages in the Ryukyu Islands by visualization method

研究代表者

山元 貴継 (Yamamoto, Takatsugu)

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：90387639

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、18世紀前半以降、琉球列島の多くの集落が「村立て」と呼ばれる集落創設・移動・再構成を経験し、現在みられるような位置・構造となる集落の基盤を形づくる以前の旧集落「古島・元島」がいかなる位置・構造を持っていたのかを分析した。加えて、「村立て」以降、住民がどのような秩序をもって新集落に移動した可能性が高いのかも明らかにした。

とくに本研究課題では、明治32～36年に沖縄県一帯で実施された「土地整理事業」以降の地籍図とその記載とを活用し、現地調査に加えてGIS(地理情報システム)を援用しつつ、「古島・元島」の地形的条件などを詳細に検討したほか、その後の住民移動についても図示を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

沖縄の多くの集落が「村立て」を経験していること自体は広く知られているが、それ以前の旧集落「古島・元島」が具体的にどのような位置・範囲にあったのかについては、現地の住民でも曖昧な伝承に頼るしかないことが多い。また「村立て」後の移動過程はさらに不明で、さも現在の住民の先祖が一斉移動したかのように語られがちである。

本研究課題では、「古島・元島」の位置・範囲を正確に図示するだけでなく、その移動自体に当時の農業的変革が関わっている可能性をも示した。本課題のような手法・視点での各地域に対する分析が進むことで、南西諸島の集落・村落の歴史の変容について、その過程が大きく書き換えられることが期待される。

研究成果の概要(英文)： In this research project, since the first half of the 18th century, many villages on the Ryukyu Islands experienced the establishment, movement, and restructuring of settlements called "Muradate", before forming the foundations of villages that have the positions and structures we see today. And we analyzed the position and structure of the former villages called "Furujima" or "Motojima". In addition, we also clarified that the people of those former villages have moved to the current villages after "Muradete".

In particular, in this research project, we used cadastral maps and their descriptions on "Land Readjustment Project" implemented in the whole area of Okinawa Prefecture from 1899 to 1903, and examined the topographical conditions of "Furujima" or "Motojima" were examined in detail by using GIS (geographic information system) in addition to field surveys, and the subsequent migration of residents from old villages was also attempted to be illustrated.

研究分野：歴史地理学

キーワード：沖縄 集落 村立て 地籍図 GIS(地理情報システム) 土地所有 地形 土壌

1. 研究開始当初の背景

(1) 多く伝承で語られながら実態不明な「古島」「元島」 南西諸島の中でも現在の沖縄県域に大きく重なる、明治期まで首里王府のもとにあり続けた琉球列島の各地においては、王府の指導などもあり 1730 年代以降、それまでの集落を移動・再構成させたり、新規の集落を創設したりする、いわゆる「村立て」が多くみられたことが知られる。そして、自集落の住民が「村立て」以前にはそれぞれそれぞれの旧集落「古島」「元島」に居住していたという歴史的事実も、琉球列島の多くの集落が共有している。

しかしながら、南西諸島の人々が長年生活の舞台とし、この地域におけるかつての人々の環境適応を示しうる「古島」「元島」ながら、それらの具体的な位置や範囲については、「村立て」時期が古く、また現在ではその跡地は粗放な土地利用となっていることが多いことから、曖昧な伝承に頼るほかない。

(2) さらに抽象的な説明にとどまりやすい「古島」「元島」から現集落への住民移動 また、現在も残る歴史的集落の多くが、これら「古島」「元島」から移住してきた住民の子孫となりやすいことも知られつつも、その移住が王府の指示のうちどのような点を重視してなされ、住民は現集落にどのような秩序をもって移動したのかについては、全く明らかになっていないといっても過言ではない。そのため、「村立て」時点から現在みられるような構造や景観の集落がみられていた、との各種記述も散見される。

2. 研究の目的

(1) 旧集落「古島」「元島」の位置・範囲特定と図示 本研究は、琉球諸島各地の「古島」「元島」が具体的にどのような位置・範囲にあり、いかなる条件を求め、どのような構造をもって存在していたのかを明らかにすることを目指したものである。「古島」「元島」の位置や範囲、構造を示す明確な史資料は、「村立て」時期の古さもあって、存在しないと言っても過言ではない。そこで本研究ではとくに、GIS（地理情報システム）を援用し、明治 32～36 年に沖縄県域の多くで進められた「土地調査事業」によって作成された地籍図とその記載などを活用し、「古島」「元島」のより正確な位置・範囲、そして構造を明らかにしていくこととした。そして、「古島」「元島」の詳細な位置・範囲、そして構造が把握されることにより、各種史料や現地調査から明らかになる地形的条件、地質条件などとの参照が可能となり、「古島」「元島」がどのような条件を前提に立地展開していたのかも分析することが可能となる。

(2) 「古島」「元島」から現集落への住民移動時にみられた秩序の解明 旧集落「古島」「元島」から「村立て」による現集落への移動がどのように行われた可能性が高いのかを、地籍図などに記載された地目（税制上の土地利用区分）と土地所有者をデータベース化し、相互参照することにより推定することを目指す。その過程についても、GIS を用いて図示化し、移動時にみられたであろう秩序を明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) GIS（地理情報システム）を援用した「古島」「元島」の位置・範囲の特定と図示 「土地整理事業」当時の地籍図などは、近代以降の史資料ではあるものの、それ以前の各地域の状況を色濃く残した記載がみられる。「土地調査事業」では、調査時点での各地の宅地・農耕地・山林などについて、地筆単位で地目（税制上の土地利用区分）・土地所有者が明確に調査・記録されている。そして作成された地籍図は、この地域においては沖縄戦の影響もあって残されている地域は多くなく、また図面自体も当時の技術によるものにて歪みが大きいものであり、必要に応じて、第二次世界大戦後の「一筆地調査図」なども参照する必要があるものの、現行の地籍図 GIS データをもとに幾何補正することで、各地筆が現在のどこに相当するののかをかなり正確に把握することができる。

(2) 旧集落「古島」「元島」から現集落への移動時にみられた可能性の高い秩序についての解明 本研究では、調査当時の記録になるとはいえ、地籍図などに記載された各地筆の地目や土地所有者についてデータベース化を行う。そして、それらの地筆データどうしを相互参照することにより、「古島」「元島」を構成する一帯の土地所有が現集落のどの住民と結びついているのかを分析することとした。農耕地については、琉球列島ならではの土地共有・割替制度である「地割制度」のため、地籍図などに記載されたその所有者はあくまで調査時点のものになってしまう一方で、墓地や山林、原野などは土地所有関係が長期にわたって維持されやすく、と

くに「村立て」後は墓地や山林、原野となりやすい旧集落「古島」「元島」は、その所有が後々まで現集落の特定の住民のものとなっていることが多い。旧集落に所有地を残しつつ、現集落の特定の宅地に移動している住民の存在に注目することにより、旧集落から現集落への移動がどのように進んだのかを明らかにすることができる可能性が高い。

4. 研究成果

(1) 泥岩露出地域斜面の湧水帯を前提に等高線方向に屋敷地を並べていた可能性の高い「古島」「元島」 「土地調査事業」時の地籍図などに記載された旧集落「古島」「元島」一帯の各筆の地目（税制上の土地利用区分）とその所有とを詳細に検討した結果、同一の土地所有者の所有となってきた「墓地とその周囲の林野・原野」で構成される地筆ユニットが集中的にみられやすいことが確認され、しかもその地筆ユニット数は、伝承上の「古島」「元島」の戸数と比較的一致しやすかった。面積的にも 600~900 m²とよく揃っていたそれらの地筆ユニットは、現在ではその中央部が墓（亀甲墓など）となっているものの、背後の石灰岩斜面と下方の平坦地、その傾斜変換点の湧水を共通して見せている。泥岩露出地域において、等高線方向に並びやすいこれらの地筆ユニットこそ、旧集落「古島」「元島」を構成していた各屋敷地である可能性が高いものと推定された。また、各地筆ユニット内には狭いながらも水田とすることが可能であろう水質・土壌の「平場」をもち、かつ、各ユニットの周囲どうしは、それぞれ面積 2~3 町歩の斜面を確保できるだけの余裕をもった配置となっていた。こうした状況証拠から、「古島」「元島」とされる泥岩露出地域斜面の、同一の土地所有者の所有となってきた「墓地+α」の地筆ユニット群こそかつての旧集落を構成していた屋敷地群であり、それらの地筆ユニット周囲の一定面積までの斜面が、「古島」「元島」の具体的な位置と範囲である可能性が高いと判断された（図 1）。必ずしも恵まれているとは言えなかった当時の家屋を前提に、強風を避けることができ、

当時は徴税のためにも耕作が求められていた稲作が可能な「平場」と湧水とが得られ、同時に、自身の食糧を得るための畑作地を確保できる一帯をとの条件を求めて、現在の各集落とは異なる段丘地形に、「村立て」以前の旧集落が立地していたことがうかがえた。

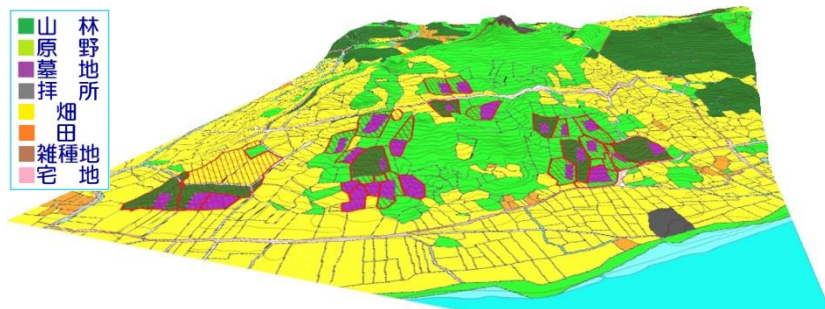


図 1 1903 年当時の「土地調査事業」地籍図記載をもとに GIS で図示した「元島」一帯の土地利用と「墓地+山林など」地筆ユニットの分布

(2) 後の家屋の増大を見越した構造の「格子状」集落への秩序をもった移動の可能性 地籍図などに記載された各地筆の土地所有者をデータベース化し、相互参照することにより、先述した「古島」「元島」の一帯に土地を所有し続けた住民は、当時推奨されるようになっていたサトウキビ栽培などには適した緩斜面を指向し、農耕地の領域と屋敷地群とを明確に分けることにもなった「村立て」によって、一定の傾斜を持つ緩斜面の範囲に多く構成されることになった「格子」状集落の各街区のうち、比較的標高の高くなっている中央部に多く屋敷地を確保していることが明らかになった（図 2）。そもそも「格子」状集落を構成する街区の数は、伝承による「古島」「元島」時の戸数とも一致しやすい傾向があることも明らかになっており、それらを総合すると、「村立て」により設定された横長街区（多くは「横一列」型街区）の数は、「古島」

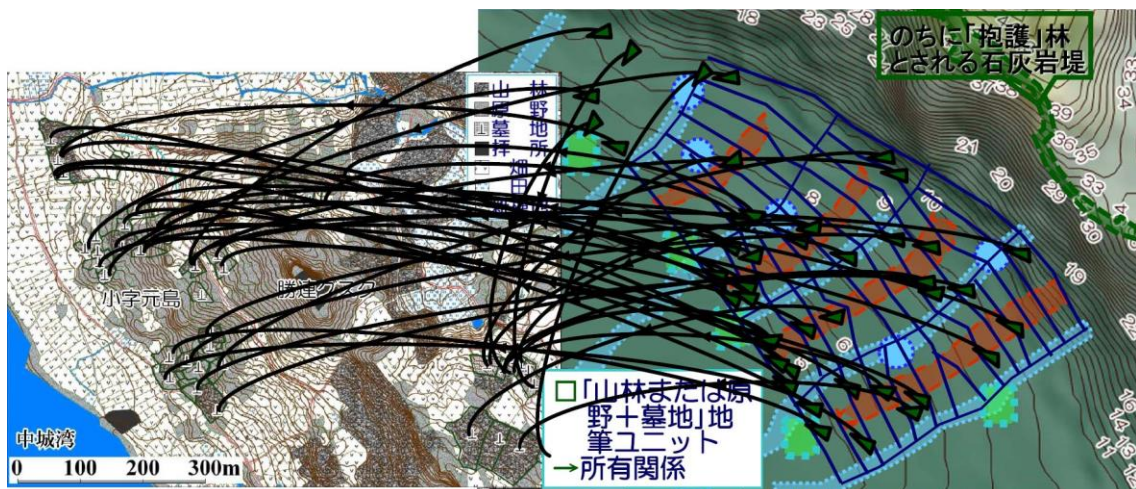


図 2 1903 年当時の「土地調査事業」地籍図記載をデータベース化することにより明らかになる「元島」一帯(左)の「墓地+山林など」地筆ユニットとのちの集落(右)住民との土地所有関係

「元島」時の戸数に対応する形で設定された可能性が指摘された。そして、当初移動した住民はそれらの街区の中央に屋敷地を多く求めて「本家」となり、その両隣などに、のちにそれらの住民の「分家」家屋や、新規の流入者の家屋が設けられ、余地が埋められていく（図3）中で、現在みられるような、整然と「横一列」型の街区が配列され、それらの各街区に3～5戸の屋敷が並ぶ「格子」状集落の構造が、段階的に形づくられていったものと想定された。

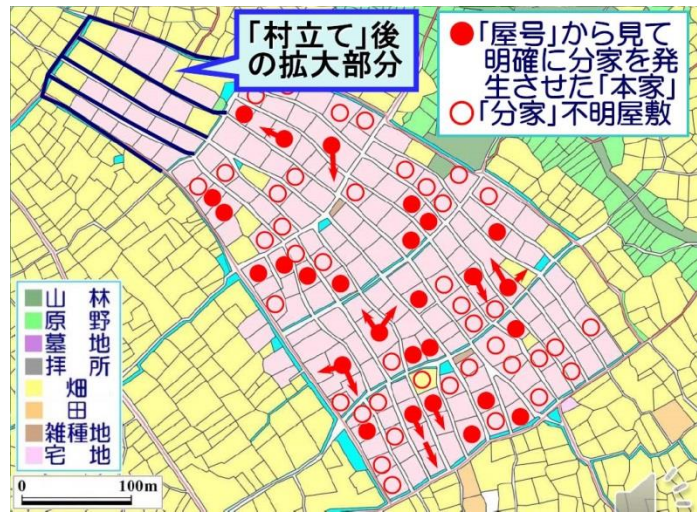


図3 1903年当時の「土地調査事業」地籍図記載をもとにGISで図示した現集落の一带の土地利用と当時の「屋号」からみた「本家」「分家」関係

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 鎌田誠史、山元貴継、浦山隆一、澁谷鎮明、齋木崇人	4. 巻 791
2. 論文標題 南西諸島・喜界島における村落の地形的立地条件と空間構成の特徴 - 第二次世界大戦前後の村落空間の復元を通じて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.87.76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 澁谷鎮明	4. 巻 16
2. 論文標題 韓国における「白頭大幹」の評価と「脈」の論理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 貿易風 (中部大学国際関係学部)	6. 最初と最後の頁 71082
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山元貴継	4. 巻 72-4
2. 論文標題 日本統治時代の台湾東部における日本人移民村の集落構造と其の変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 337-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4200/jjhg.72.04_337	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山下亜紀郎・駒木伸比古・兼子 純・山元貴継・橋本暁子・李 虎相・全 志英	4. 巻 28-2
2. 論文標題 韓国梁山市における土地利用からみた新旧市街地の地域特性比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 GIS - 理論と応用	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 山元貴継	4. 巻 63-1
2. 論文標題 アニメ聖地巡礼を地理教育に活かす	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理学	6. 最初と最後の頁 42-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山元貴継	4. 巻 72-3
2. 論文標題 書評: 米家泰著作『森と火の環境史 - 近世・近代日本の焼畑と植生 - 』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 320-321
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渋谷鎮明	4. 巻 15
2. 論文標題 朝鮮時代後期の農書に見るト居・相宅の条件 『増補山林經濟』を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 貿易風	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 近世琉球における「格子状集落」の成立をめぐる一試論
3. 学会等名 沖縄県立博物館・美術館シンポジウム
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 地籍図と現地調査から見た沖縄の「ムラグシ（村立て）」
3. 学会等名 鶴見大学文化財学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 山元貴継・鎌田誠史・浦山隆一・澁谷鎮明
2. 発表標題 沖縄県における明治30年代の「屋敷地番」とその活用
3. 学会等名 日本地理学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 九州地方南部における「城」と「城下町」の地方的特殊性 - 高等学校地理歴史科などにおける教材化を目指して -
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 沖縄本島・旧勝連間切南風原村における「格子」状集落の成立
3. 学会等名 歴史地理学会大会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 台湾歴史地理学研究における地籍資料の可能性と課題
3. 学会等名 日本地理学会（台湾の地理学研究グループ）
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 沖縄本島・旧勝連間切南風原村における「格子」状集落の成立
3. 学会等名 「生き続けるモンスーンアジアの 持続可能な集住環境の叡智の探求」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 島津藩領「麓」集落の空間構造 - 「門割」に注目して -
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 渋谷鎮明
2. 発表標題 京釜鉄道発行「韓国京城全図」に描かれた旧韓末ソウルの景観
3. 学会等名 歴史地理学会（神戸大学）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡本耕平監修、阿部康久・土屋 純・山元貴継辺	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 論文から学ぶ地域調査 - 地域について卒論・レポートを書く人のためのガイドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鎌田 誠史 (Kamata Seishi) (70512557)	武庫川女子大学・生活環境学部・准教授 (34517)	
研究分担者	浦山 隆一 (Urayama Takakazu) (10460338)	富山国際大学・現代社会学部・客員教授 (33202)	
研究分担者	渋谷 鎮明 (Shibuya Shizuaki) (60252748)	中部大学・国際関係学部・教授 (33910)	
研究分担者	松井 幸一 (Matsui Koichi) (40612437)	関西大学・文学部・准教授 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------